伊勢志摩地域農業改良普及センター
JA伊勢

令和9年産

大麦「ファイバースノウ」栽培暦

排水対策の徹底
湿害が収量・品質を左右する

11月上旬からの適期播種
早播き・遅播きを避ける

麦踏みの実施
分げつ促進と凍霜害の防止

赤かび病は2回防除
開花始め～開花盛期から

令和8年8月作成

月　旬	11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育ステージ	播種・出芽			分げつ						幼穂形成			節間伸長			出穂・開花			登熟			成熟・収穫		
施肥・管理	種子消毒・基肥・播種			麦踏み（3葉期～節間伸長開始期）																				
										穂肥1（幼穂形成期）						穂肥2（止葉抽出始期）								
	排水溝の整備・降雨後の溝さらい（随時）																							
防除・収穫	土壌処理除草剤									生育期除草剤									赤かび病1	赤かび病2				
																						収穫（6月上旬まで）		

※幼穂形成期・止葉抽出始期・開花期は年次により変動します。生育予測を参考にしつつ、必ずほ場で生育を確認して作業時期を決めてください。

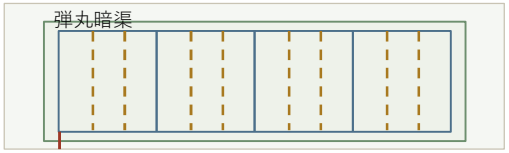
品種の特性

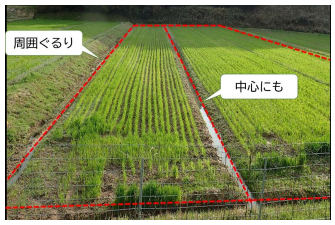
ファイバースノウは押麦や麦茶などに使われる六条大麦です。精麦したときの白さと粒のそろいが評価を左右します。子実タンパクが高いと硝子粒が増えて白度が落ちるため、窒素を効かせすぎないことが品質確保の要点になります。

排水対策

大麦は湿害に弱く、ほ場の排水性が収量と品質を大きく左右します。出穂期以降の排水不良は登熟を妨げるため、春先の長雨に備えて溝を通しておいてください。

- ほ場周囲に明渠を設け、内部にも5～10m間隔で排水溝を入れる
- 弾丸暗渠を2～3m間隔、深さ30cm程度で施工する
- 周囲溝は必ず排水溝・排水口につなげる
- 明渠内を点検し、土塊などを取り除いて水がたまらないようにする
- 降雨後は溝さらいを行う





排水溝は周囲をぐるりと囲い、中心にも設ける。

土づくり

- 土壌診断に基づき、pH6.0～6.5を目標に石灰資材を施用する（苦土石灰はpH5.5以上で100kg/10a、5.5未満で200kg/10a）
- 稲わらをすき込み、牛ふん堆肥1～2t/10aを施用して地力を維持する
- 大麦は小麦より酸性に弱いため、酸度矯正はとくに丁寧に行う

播種

播種時期	11月上旬から始め、11月末までに終える（山間部は10月下旬から）
播種量	7～9kg/10a（ドリル播き、条間25cm）
播種深度	3cm程度（5cm以上の深播きは出芽不良を招く）

早播きは凍霜害や品質低下の原因になります。砕土・均平を丁寧に行うと、出芽が揃い土壌処理剤の効果も高まります。

種子消毒

対象	薬剤名	処理方法・使用量
裸黒穂病・斑葉病など	ベンレートTコート	乾燥種子重量の0.5%（種子10kgに50gを粉衣）
斑葉病・網斑病、鳥害	キヒゲンR-2フロアブル	種子10kgに200mℓを塗抹

施肥

区分	時期	窒素 kg/10a	ねらい
基肥	播種前・播種時	6～7	初期生育の確保
穂肥1	幼穂形成期（6葉期頃・2月中旬）	2～3	穂数・粒数の確保
穂肥2	止葉抽出始期（3月下旬）	1～2	収量の確保

大麦に実肥は施用しません。出穂期以降に窒素が効くと硝子粒が増え、精麦白度が下がって品質ランクの低下につながります。

- 穂肥2の時期は稈長も伸びやすいため、過剰な施肥は避ける
- 穂肥1から穂肥2まで期間が空くと肥料切れを起こすことがある。葉色が淡い場合は窒素1～2kg/10aを早めに追肥する
- 播種年内に降雨が多く生育が遅れた場合は、3～4葉期に窒素2kg/10a程度のつなぎ肥を施用する
- 追肥が出穂期以降にずれ込むと硝子粒が急増するため、止葉抽出始期を過ぎたら窒素は施用しない

施肥例（10a当たり）
基肥：化成肥料14-14-14を50kg
穂肥1：化成肥料14-14-14を20kg
穂肥2：化成肥料14-14-14を10～15kg

麦踏み

3葉期から節間伸長開始期までの間に、土壌が乾いた日を選んで行います。12月から2月に15～20日間隔で2～3回実施すると、分げつが増え、凍霜害の防止や倒伏の軽減にもつながります。生育量が不足しているほ場では実施しません。

雑草防除

時期	薬剤名	使用量/10a	希釈水量	使用時期
播種前～出芽前	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	50～100ℓ	耕起前・播種前、播種後出芽前
播種直後	リベレーターフロアブル	60～80mℓ	100ℓ	播種後～麦3葉期（イネ科雑草1葉期まで）
播種直後	ムギレンジャー乳剤	300～600mℓ	50～100ℓ（少量25～50ℓ）	秋播栽培のは種後出芽前（雑草発生前）
生育期	ハーモニーDF	5～10g	50～100ℓ	播種後～節間伸長前
生育期	ゴーゴーサン乳剤	300～500mℓ	70～100ℓ	生育期（雑草発生前）、収穫60日前まで。全面土壌散布

収穫前に、異物混入の原因となるカラスノエンドウなどを抜き取ってください。

赤かび病防除

赤かび病はかび毒（DON）を生成します。食品衛生法の基準値は1.0mg/kgで、これを超えた麦は食用として流通できません。県産麦は近年、他産地に比べてDONの検査値が高い傾向にあります。適期の2回防除を徹底してください。

防除	時期	薬剤例	希釈倍率	散布量/10a
1回目	開花始め～開花盛期	トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	60～150ℓ
2回目	1回目の7～10日後	ミラビスフロアブル	1,500～2,000倍	60～150ℓ

- 開花前の防除は効果が劣ります。必ずほ場で生育を確認してください
- 2回目は薬剤感受性の低下を防ぐため、1回目と系統（FRACコード）の異なる剤を使ってください。トップジンMはベンズイミダゾール系（1）、ミラビスはSDHI系（7）で系統が異なります
- 大麦は小麦と使用基準が異なります。トップジンM水和剤は収穫30日前まで・出穂期以降1回、ミラビスフロアブルは収穫14日前まで・2回以内で、大麦の網斑病にも効果があります
- 出穂期以降に平均気温18～20℃で湿度80%以上が3日以上続く場合や、降雨・低日照が続く場合は発生が多くなります

※「開花期」とは、1穂につき数花開花しているものが全穂数の40～50%に達した日を指します。防除適期の早限である「開花始め」は、これより早い時期です。

収穫・乾燥・調製

- 出穂後およそ40日、穀粒水分が28%以下になったら速やかに収穫を始める。刈り遅れて雨に当たるとかび毒が生成されやすくなる
- 水分が25%を下回ると節折れが増えてロスにつながるため、穂首が曲がり始めた頃を目安に刈り取る
- 収穫後の放置は厳禁。乾燥は熱風温度50℃程度、毎時の水分低下率2%程度を目安とする
- 赤かび粒は粒厚が薄く比重も軽いため、粒厚選別と比重選別を併用する
- 小麦が混入した大麦は流通できない。ほ場での抜き取りと機械の清掃を徹底する

農薬使用にあたって　ラベルの記載内容と最新の登録内容を確認したうえで使用してください。周辺作物への飛散（ドリフト）に十分注意してください。